金錢よりも、大切に思ふ黑髮を、可愛我子の爲めなれば斯樣になされたのであります。私は母親と云へば同樣、嘸ぞ、此の樣に思ふてくれるであらうに、夫を夫れとも思わずに、母に向つて、知らかに言云ふた事もなく、一日片時の孝行さえ盡した事も無い、夫れを思へば悔しくて、今此の御膳に向ふにつけ、白米は親の肉、此の飯一粒々々が母御の髮筋一筋々々に當ると、思ひますれば、我等が樣な賤しい者でございますが、餘り哀れに思うて涙に胸もふさがり、中々食事も喉へは通りませぬ』と。物語り致しますると、正算僧都は一部始終を聞かれ『さてさて左樣でありましたが、親は思へど、子は思はずと、そう云ふ事とは夢にも知らず居たのは、淺間しき事でありました』と。暫時の間ひれ伏して感涙に咽ばれたと云ふ事でございます。

此の樣に親が子に對する慈愛と云ふものは、實に熱裂なるものであります、けれども、子は此の厚き慈悲を受けつつある事を思はない。玆において日蓮大上人も斯くの如くであります。吾吾末法一切衆生の爲めに去る六百七十有餘年のその昔悲雨慘風の六十年の御生涯を、師子奮鬪せられたではありませんか。噫！。吾等聖人の門下よ、何んぞ、永き夢中より目覺めて佛の慈悲に報せずに居られませふ。

遠藤霞溪

題聖誕七百年記念塔　塔老父之建立而從來有鏡石之稱

聖誕今玆七百年　幸逢嘉會喜奇緣　延山鏡石人知否　讃詠玄題永刼傳

思鄉

僻性宜應住僻村　枉交塵累豈堪煩　常懷高祖棲神地　況我師親老尙存

慈上謝恩

驅烏往歲侍貞松　今日阿蒙上鷲峰　法乳恩深猶未報　頤顏只喜接慈容